

作家とその妻

—Sherwood Anderson 論 (I)—

谷 口 陸 男

I.

一人の作家とその妻、或いは女性との交渉は彼の文学と一体どのような関係を持つものであろうか。もとよりその関係は多種多様であって、従って答えは簡単ではない。しかしその問いを Sherwood Anderson と云う特定の作家に限る場合、問題は比較的明確なすがたを帯びて来る。なぜなら1936年に彼は先輩の Theodore Dreiser に宛てて次の様な手紙を書き送っている——“I think it is our loneliness for each other that has made most of us throw too much on women.” 1936年と云えば彼の死に先立つこと五年前、63歳になった時のことであり、これらの言葉は彼の晩年の孤独と寂寥をまざまざと物語っている。事実、晩年の Anderson は作家としての自信の喪失と焦燥感にさいなまれてわれわれに或る痛ましさを感じさせる程である。何よりもそのことをはっきり示すのはその時期に手をつけては未完のまま打ち棄てて行った作品群だ。“Brother Earl,” “A Late Spring” “How Green the Grass” などがそれだが、その内容はいずれも人生の落伍者、自信喪失者を取扱い、しかもそれらの小説自体が全部未完のままに棄てられているのである。これ程はっきりと Anderson の晩年の loneliness を教えているものはあるまい。だがしかし彼の loneliness は決して晩年にのみ始まったのではなかった。既に “Perhaps Women” (1931) の出版直後、彼が作家としてどの様な位置にあったかを明瞭に示すエピソードが伝えられている。——その時、“The Nation” 紙が主催して Greenwich Village のさるレストランで出版記念のパーティーが彼のために開かれた。しばらくの間 Anderson は会話の中心であったが、途中で思わざる客が現れた、当時日の出の勢にあった William Faulkner である。二人の作家は親しげに顔を合わせそして冗談を言い合った、しかし Faulkner が Anderson のそばを離れると、その場に居合わせた殆ど凡ての人々が彼のあとに続き Anderson は只一人取り残された。彼は一人その場に坐って静かに微笑を浮べ手に持った大きな帽子をゆ

っくりと撫でていた、一言も口をきかないですっと帽子を撫で続けたと云う。——或いはそのことのあった二三年以前に、New Orleans の食堂で一人の男が Anderson に近づき、もしやあなたはスミス 某氏ではあるまいかと尋ねた。彼は友人が驚く程の苦が苦がしさをこめて答えた、“No, but I wish I was.” New Orleans は既に Anderson が何度も訪れ、しばらくそこに住み謂わばその地の——と云うよりも新しい文学の担い手としてアメリカのみならず国外にも名を知られた——名士であった筈であり、少くとも五年前までは彼の肖像が何度も新聞を飾った筈である。それが無名の某氏にしか見えないとは。彼の心中の寂しさ思い見るべしである。

これらのエピソードはしかし作家と云うものの名声のはかなさ、或いはジャーナリズム——殊に最も早く移り変って行くアメリカのジャーナリズムの冷酷さを物語っているだけのことかも知れない。そして Anderson もそれのもたらず寂しさには堪え得たであろう。だがそれよりももっと彼に打撃を与えたのは、彼の次代に、或いは次の次の世代に属する若い作家によって与えられた裏切り乃至は攻撃であった。全く、彼の切り開いた道を通りながら彼ほど、後に続く者によって突きとばされ押し倒され踏みすけにされた作家は珍しい。第一の矢は Hemingway によって放たれた。1926年に Hemingway が出した “Torents of Spring” は Anderson と Gertrude Stein とを痛烈に諷刺する目的で書かれていた。しかもその Hemingway が六年前に “instinctively in touch with everything worth while going on here” の青年だからと云って Anderson 自身が紹介状を書いてバリにいる Stein にひき合わせ、その上作品の出版者を見つけてやった直接の後輩だったのである。第二の裏切りは Faulkner によって行われた。彼は処女作 “Soldiers’ Pay” (1926) の出版を Anderson に世話して貰い、絶えず Anderson から激励されていたにもかかわらず、第二作 “Mosquitoes” (1927) の中で Anderson を含む New Orleans の文学サークル “The Double Dealer” 誌の仲間を諷刺し、それ以前にも、或る無名画家の絵画集の序文で Anderson の style の parody を書いた。そしてもっと若い世代に属する人々はもっと残酷だった。たとえば Thomas Wolfe は何の理由もなく老 Anderson に喧嘩を売り You are “finished.” とののしった。また William Saroyan は彼の作品を false であると云う。そして Anderson はこれらの諷刺或いは攻撃に対して殆ど一言も反撃しなかった、或いは反撃し得なかった。

しかし不思議ではないか。何故に Anderson は、若い作家に大きな影響を与えながら、しかも彼一人がかくも集中攻撃を浴びるのか。われわれはそこに、

彼の次代に属する人々の hard-boiled と呼ばれる特有の冷い心情を見て取ることも可能である。しかし問題は決してそれだけで終らない。なぜなら若い世代の攻撃は殆ど Anderson 一人の頭上にそそがれてその他の人々は無傷のままに残っているからである。従って彼に加えられた集中攻撃は非情派である若い世代の間に原因があると云うよりもむしろ Anderson 自身の中に彼らの攻撃を誘うものがあつたのではないか。そしてそれが若い人々の集中攻撃を誘発したのではないのか。——われわれがこう云う疑問を抱いて彼の作品を見渡す時、処女作 “Windy McPherson's Son” (1916) の昔から “Kit Brandon” (1936) の晩年に至るまで一貫して、hard-boiled の逆のもの、つまり soft-boiled の心情によって凡てが描かれていることに気づくのである。彼の作品は凡て、凡ゆるものによって影響され易い、暖い、傷つき勝ちな心によって描かれたことを明瞭に示している。そして loneliness を最も痛切に受け取るのもその心情のためであり、同時にまたその loneliness に堪え得ないのもその心情の故だ。だから Anderson と若い世代との関係は人間の loneliness を痛切に感じ取りそしてそれに堪え得ない者とその loneliness に堪え得る者、と云うよりもそれを足場にして自己の世界を展開した者との組合わせが生み出す悲劇であつた。勝負は始めから決っている。Anderson は絶えず under dog の悲哀をなめざるを得なかつた。彼の作中人物が常にこの敗北感と loneliness を明瞭に示しているのも理由のないことではない。負け犬はしばしば勝ち犬が自己に無用の勝利感を保証するための対象となる。泣き虫を見れば悪童どもは無用の手出しをせざるを得ない。非情派の若い人々にとって Anderson の soft-boiled は、嘲笑しいじめるのに恰好の対称であつたにちがいない。Anderson 一人の上に彼らの攻撃が集中した所以である。そして Anderson はそれによつてますます孤独と寂しさを倍加し焦燥と自信喪失のうちに晩年を終えねばならなかつた。

Dreiser に宛てた手紙の中の言葉はこの間の事情を明瞭に物語るものだ。つまり彼の傷つき易い心は人間の loneliness を痛切に感じ取りそしてその loneliness に堪え得ずして救いを女性に求めたのである。Anderson にとって女性とはその様な機能を果すものであつた。がしかし問題はそれですっかり割切れ終るのではない。なぜなら Anderson の柔い心は今度は逆にその女性によって影響を受け始めるからである。そしてその影響が次第に彼の心にとって重荷になって来ると、彼の敏感な心はその影響を受け切れない自己を意識し、自己とその女性との間に横たわる越え難い断崖を感じ取り、従つてそのことが自己の孤独感を一層強く彼の心に甦らせる結果となるからである。

Anderson のこの影響を受け易い 性格を端的に物語る 言葉をわれわれは矢張り彼の手紙の中に容易に見出すことが出来る。1931年、兄の Karl宛に彼は次の様に書いている——“It is rather strange how much I am influenced by women. They are such an important and necessary part of my life. Another woman came along and got at me in a new way.” この手紙と先に引用した Dreiser 宛の手紙とを組合わせてみる時、われわれはそこにひとつの方式が出来上ることを窺見する。すなわち、Anderson は人間の loneliness を痛烈に感じそれに堪え得ずして救いを女性に求めたが、ほかならぬその女性こそ彼の人生を決定する程の重大な影響を彼に与えずにはいなかった。そして何れの手紙も女性を複数にして居り、実生活においても次々に四人の妻と結婚している事実を考え合わせる時、その方式は次の様な結論を導き出すであろう——その女性からの重大な影響が今度は逆に彼の孤独感を深め、彼はまたしてもそれに堪え得ずして他の女性に救いを求めそして再び同じことが繰返される。この螺旋状のプロセスこそ彼の本質を明確に示すものではなからうか。言葉をかえて言えば、Anderson と数人の女性とのかかわり方を眺めることによって、人間としての Anderson を、従って彼の文学の基本的性格をはっきり取り出して見せることが出来るのではないか。この小論の目指すところはそこにある。

II.

Anderson は米西戦争が起きた時従軍して 1899 年に Cuba の Cienfuegos に上陸しそこに四カ月駐屯していたが、その間に彼は戦友たちから “a fellow talented at finding a girl when he wanted one” と云う評判をとっていたと云う。この事実から推して彼をめぐる女性群は恐らく相当な数にのぼるにちがいない。その凡てをここに取り上げることは困難だから、ここでは対象を彼と正式に結婚した四人の妻に限りたい。

彼の死後出版された “Memoirs” (1942) の中で Anderson は書いている——“My first three marriages each lasted exactly five years. I have always been sure that none of the women were to blame.” これらの言葉は彼の心の tenderness を示すと同時に、破婚の因をなしたものの非難は相手の女性に向けられるよりもむしろおのれ自身或いは自己とそのような女性との組合わせに向けられている。そしてこの様な態度の中に実は彼の文学史的位置——全く新しい文学の創始者としての位置——を暗示するものがある。なぜなら Anderson が

出現するまで、アメリカ文学は凡てその眼を外界に向けていた。Upton Sinclair や Jack London の社会主義の文学はもとよりのこと、Anderson の直ぐ前に続く Dreiser と Sinclair Lewis の文学も彼らの批判と非難とをアメリカの資本主義乃至それによって規格化された村落或いは救いがたい村落の因習に向ってそそぎ、すべての悪の原因をなすものは外界にあるとして、多少でも疑いの眼を自己に、つまり人間存在の内側に向けたことはなかった。彼らにとって、事態は甚だ単純であり、彼我相対立する場合、我は不問に附して専ら非難を彼の側に向ける。人間をゆがめるものは只外界にあるのであって従って外界の改革が凡てを決定するものと考え、いきおい彼らの外界に向ける非難と攻撃は單純明確猛烈であった。もちろんその対象が女性である場合と社会である場合とを混同することは誤りであろう。だが少くとも基本的態度においてはいささかも変るものではない。たとえば、Anderson は第四の結婚以後、labor movement に関心を示し1931年彼は公然と自らを a radical と宣言するのであるが、その後の實際運動においても作家活動においても彼は決して Dreiser や Lewis の如く明確強力になり得ず常にためらい勝ちであり始めから敗北の tone を帯びていたのである。或いは“Marching Men” (1917) や“Poor White” (1920) の如く社会的色彩の濃い作品を調べてみても作者の非難はひたすら外部世界に向けられていると云うのではなく、従って主人公の失敗と敗北は必ずしも社会のせいではない。むろんかかる態度は社会運動の側から云えば曖昧で敗北主義的で非難の的となるであろうが、実はこの態度こそアメリカ文学に新生面を切り拓く最初のそして欠くことの出来ない重要な礎石であった。ここで Anderson は批判の眼を外部的世界に向ける代りに自己に、自己の内部に向ってそそいだのである。人間を本来ゆがまざるものと見、それをゆがましめるものは外界にありと考え、非難を外界に向って集中する——と云った態度を取ることをやめて、ゆがんだままの人間をそのまま彼の内部に分け入って描こうと試みたのである。眼を外に向ける社会的文学に代って、内部心理や意識の流れの領域に踏み込む文学はアメリカでは Anderson を待って始めて生れることが出来た。彼以前にはそのような文学は皆無であった。そしてそこにこそ彼の文学史的位置があるのである。ここで忘れてならないのはかかる Anderson の文学は既に述べた如く彼自身の生得のものから必然的に生れて来たのであって決して Freudianism の影響から、謂わば外在的な因子によって書かれたものではないと云うことだ。諸君も批評家も Anderson の作品の中に Freud の影響があることを異口同音に指し示す。そして事実 Freud の精神分析学はすでに1913年以前

に雑誌 Friday Review に紹介され、また 1916 年夏 Anderson はアメリカ最初の psychoanalyst の一人 Trigan Burrow に会い Freudianism の話を聞いて shock を受けたこともあると云う。しかし、彼は数人の友人に自分は Freud を読んだことがないと明言し、“Memoirs”の中でも“I never did read him”と書いている。恐らく彼が Freud を読んだことのないのは真実であろう。そして Friday Review に載った紹介は決して未だ流行するところまでは行って居らず、また Burrow に会う以前の Anderson の作品に既に後年の傾向が見えていることから推して、Anderson 自身の中に深層心理や意識の流れを捉えようとする要請が先ずあって、その後文学仲間の口から聞いたり断片的に読んだりした Freud の知識を自分の要請の支えとして利用したと云うのが真相であろう。(ここは今少し考証を必要とするが、ここでは結論だけを述べるに止める。)いずれにしろ、Anderson によってアメリカ文学がそれまでに欠いていた内面心理の領域を持つに至ったことは間違いない。そしてそれが彼我対立の場において、非難と批判を彼よりも我の側に多くかけようとする Anderson の性癖から出発していることも確実であろう。対女性の場合、そのことを何よりもはっきり示していると思われるのは次の手紙だ——“poor E. is very nice—much nicer than I will ever be—and I do not want her any more. C. and T. were nice too. Why should I not face myself—a wanderer.”(友人 Ferdinand Schevill への手紙、1929 年)

この手紙の中で poor E. と記されているのはその年の一月半ばに離婚した第三の妻 Elizabeth Prall のことであり、C. とは 1904 年結婚した第一の妻 Cornelia Lane を指し、T. は 1916 年八月に結婚した第二の妻 Tennessee Mitchel のことである。第四の彼の死にまでつき添った妻 Eleanor Copenhaver の場合をも含めて、彼の結婚には一貫した特徴が眼につく。それは相手が常に或る高い教養を備え、彼に助言し忠告し彼を指導する能力を持っていることだ。たとえば第一の妻 Cornelia は富有な家庭の出で十分な教育を受けて居り Anderson と結婚後、Clyde で彼のために造った家庭ではしばしば文学を中心にした読書会が行われ、Elyria に移転した後も、彼女は a ladies' literary society に加わりその会合で本を読み“教養ある夫人”として称讃を博し、後に Anderson が小説を書き始めると、その文法的誤りをも訂正した程である。音楽教師をしていた第二の妻 Tennessee は決して良家の出ではなかったけれども Chicago に出て働きつつ、しばしば同地の芸術家や文学者の集りに出席して self-cultivation に努力しそして後には Chicago においても New York においても知識人の間

に、typical “New Woman” として称讃を集めていた。第三の Elizabeth については Anderson 自身が兄の Karl に宛てた手紙の中に妻の “gentle aristocracy” と真面目に書いて居り、1927年冬の短いヨーロッパ旅行の間に彼女の示したフランス語の流暢さは彼自身のかたことにくらべて彼の心にかすかな不安の種をまいた程だった。第四の Eleanor はこれも教養ある家庭に育った進歩的文化人で社会運動家であり Anderson と知り合った頃は南部の労働運動を指導する active であり Anderson が労働運動に関心を示し始めたのも彼女の助言と忠告によるものであった。

かくの如く一貫する四人の妻の特徴から Anderson が妻に対して求めたものは明かだ。それは女性的な魅力であるよりも、自己のうちに欠けているものを相手のうちに見出しそれに魅かれ、それによって自己のうちに無いものを補い救われようとしたのにちがいない。もっと極端な言い方をすれば、Anderson が妻に求めたものは異性的なるものよりも同性的なるものであり、肉体的なるものよりも精神的なるものであった。そのことは、彼の妻がいずれも見目美しさと女性らしさを欠いて居り、或る場合は筋骨太く男性的でさえあったことから容易に想像出来よう。しかも Anderson 自身は sex に憑かれた作家と云われ、性の露骨な描写をしばしば用い、D. H. Lawrence に最も親近性を感じていたのであるから問題は錯雑した様相を帯びて来る。恐らくここには精神分析学の好箇の問題があるだろう。彼の作品の中にしばしば、満たされざる夢と願いを抱いて放浪して行く人間のすがたを見出すのも、ここに主題を帰納することが出来るだろう。そして、「教養ある country-lady」——「typical New Woman」——「aristocracy を持った婦人」——「進歩的な社会運動家」と云う移り変りの過程の中に、前者への不満を後者によって満たされようとする彼の願いが明かに見て取れると同時に、Anderson の心の遍歴の中味をもほぼ見透すことが出来よう。

(未完)